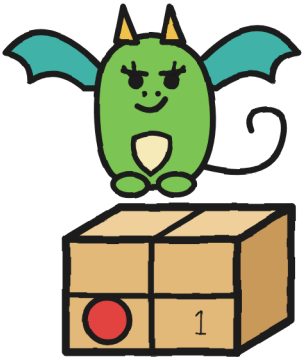
この 本の もちぬし：

ほかの だれの ものでも ない。 —J.

ありえない はいたつ・1

このにもつは かみつく

Lui Eriksson



サイズ **XL**・イラスト小説・13**+**

ありえない はいたつ 1
このにもつは かみつく

文と絵：Lui Eriksson

日本語版：LinguAula

サイズ XL・イラスト小説・13+

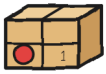
初版：2026

© 2026 Lui Eriksson · info@linguaula.com

自由にコピーして、学校でも家でも使えます。

フォント：Zen Maru Gothic、Yomogi、Zen Kurenaido、Andika、Patrick Hand、Caveat、Courier Prime（SIL OFLライセンス）。

章ごとの 練習は linguaula.com で



第 1 章

とどけられない 1番

このノートは、引っ越しの14番の箱から出てきた。箱には、太いマジックで「台所」と書いてあった。急いでいる人の字だった。中にはスプーンの一本も入っていなくて、あったのは、このノートと、くつ下が片方と、だれのものでもないゴムのカエルだけだった。お母さんにも聞いてみた。カエルにも聞いてみた。だれも、自分のものだとは言わない。

ノートのほうは、ぼくが自分のものにした。最初のページに、はじめからはっきりさせておくために、大きな字でタイトルを書いた：

グニのはいたつノート。ひみつ。

「ひみつ」って、わたしが先に読むって意味だよ。 —J.

そのみどりのメモは、ぼくが「ひみつ」と書いたときにはなかった。みどりのメモは、どれも最初からあったわけじゃない。書き足していくのはフリータで、たった一日で、ぼくより先にぼくのノートを読むのがくせになった。ときどきは、ぼくが書くより先に。でも、それはあとの話だ。順番にいこう。



ぼくたちが引っ越してきたのは火曜日だった。今日は土曜日だ。この町に来て四日、もう通りを一本まるごとおぼえた。ぼくの通りだ。家は六軒。そのまわりは、はてなマークだらけだ。

引っ越したいかどうか、ぼくにはだれも聞かなかった。大人たちが台所で決めたのだ。もう決まったことを話すときの、あの声で。お母さんはそれを「いい機会」と呼んだ。大人は、返品できないものをそう呼ぶ。

いちばんこたえたのは、自分の部屋を出ることじゃなかった。引っ越しのトラックの中で、自分でも知らなかったことに気づいたことだ。ぼくは、ともだちを作ったことが一度もなかった。いたことは、あった。でも、それは作ったのとは別だ。前の町では、ともだちは標準装備だった。三歳のとき、公

園で、バケツとスコップといっしょに渡されて、それきり、することは何もなかった。作り方は、一度も習わなかった。学校では小数のわり算を教えてくれるけれど、ともだちの作り方は教えてくれない。みんな最初から持っているものとされているからだ。

だからぼくは、やり方がわからないときにいつもすることをした。計画を立てたのだ。

ともだちを作るぼくの計画：

1. 「こんにちは」と言う。
2. おもしろいことを言う。
3. ???

2番目でつまずいた。3番目は、さっぱりだ。そのまま三日間も、そこから動けなかった。そのころのぼくは、3番目がいちばん簡単で、たった三つの単語におさまるなんて、まだ知らなかった。

新しい部屋も、助けにはならなかった。閉じたままの箱だらけで、ぼくのものは何ひとつない。だから、ホテルに泊まるみたいに寝ている。借りものの部屋で、服をすぐ手の届くところ

に置いて。そのせいで、今朝、窓の前を何かが飛んでいったとき、ぼくはすぐに目がさめたのだ。

荷物だった。

そのまま書く。そのとおりだったから。ダンボールの荷物が、くつの箱くらいの大きさで、横に赤いはんこがおしてあって、ぼくの部屋の窓の高さを、急ぐようすもなく、マイペースで飛んでいった。それから、もう一つ。さらにもう一つ。九つの荷物が、アヒルみたいに一列になって通りをわたり、向かいの店のポストから、一つずつ中へすべりこんでいった。（あとでわかったことだが、残りの十一こは、ぼくが寝ているあいだに、もう帰ってきていたらしい。）

その店には、看板が出ていて、「ありえない はいたつ」と書いてある。その下に、もっと小さく、「だれも とどけない もの、とどけます。」。そのまた下には、もっともっと小さく、あとから考えなおして書き足したみたいに、「（たいていね）」。

これで、2番目ができた。「荷物が空を飛んでいるのを見た」。

そんなの、おもしろくないよ。しょっちゅうあることでしょ。

そのメモを書いたのはフリータだ。今朝、向かいの店で会ったばかりの子だ。フリータはみどりで書く。みどりで書いたものは消えない。ためしたから、まちがいない。消しゴム、つば、セーターのそで、の順に。消しゴムは、すりへった。みどりは、へらなかった。

ぼくは、しまもようのセーターをパジャマの上に着て、道をわたった。パジャマのまま、という意味だ。スリッパをはいたまま。頭が気づくより先に、体が決めてしまうことがある。



店の中は、ダンボールと、何かが焦げたようなにおいがした。ろうそくの火を消したあとのにおいだ。左には棚があって、赤い札に「へんそう」と書いてあり、その棚に、1番から20番まで番号のついた荷物が二十こ、それぞれはんこをおされてならんでいた。その前で、むらさき色の帽子をかぶった魔女が、一つずつ指さしていた。そのとなりで、みどりのオーバーオールを着た女の子が、声に出して数えていた：

「……18、19、20。」

「全部もどってきた」と、魔女は言った。「また、だ」

ぼくがだれなのかも、どうしてパジャマなのかも、だれも聞かなかった。ふつうの店なら、それだけでじゅうぶんおかしい。でも、この店では、その朝いちばんおかしいことでもなかった。

魔女（まじょ）の名前はマラさん。「ありえない はいたつ」という店をやっていて、ぴかぴか光るはんこを持っている。おすと火花がちって、その火花が、あの焦（こ）げたにおいがするのだ。しくみは、フリータが、ぼくのノートに、ぼくに断（ことわ）りもなく説明してくれた。矢印だらけの絵で、半ページもあるから、ここでは短くまとめる：

- 荷物 + はんこ。
- 受けとる人は、消えないインクでサイン？
- する：はいたつずみ。
- しない：夜明けに、荷物は棚（たな）へ飛んでもどる。

こうすれば、にもつは なくならない。とどくことも ないけど。

棚にあるのは、もどってきた荷物だ。だれにもとどけられたことのない荷物が二十こ。しかも、送り主はみんな同じ人だった。どの荷物のラベルにも、同じ場所に、同じぎゅっとつまった字で、「さしだし人：R.」とあった。

「R.ってだれ？」とぼくは聞いた。

「ものすごく字のきたない人」とマラさんは言った。

それだけだった。もう何度も言ってきた文句を言うときの調子で、棚は見ずに、かべの、何も見るもののない一点を見ながら。フリータは、マラさんと同時にくちびるを動かした。答えを暗記しているのだ。そして、フリータにとっても、その答えでは足りないんだな、とぼくは思った。

マラさんは、もどってきた荷物を十九こ、肩にかつぐ大きな袋に入れた。その夜は、ずっと遠くの灯台にピアノを届ける仕事があって、どうせ出かけるのだから、ついでにもう一度、全部ためしてみるという。帰りは夜明けになる。少しも期待していない声だった。かれた植木に、くせで水をやる人の声。

棚に残ったのは、一つだけだった。列のいちばん先頭。1番だ。

「それは、とどけられない」とマラさんは言った。ぼくたちに言っているのではないような気がした。「ルールはひとつだけ。棚にさわらないこと」

「もちろん」と、フリータは言った。

ぼくはフリータのうしろにいて、背中で指が交差しているのが見えた。何も言わなかった。いま思うと、それが、ぼくたちがはじめて分け合ったものだった。二秒間だけの秘密。おたがいの名前を知る前の。

フリータは、土曜日になると店にいる。マラさんの何なのかは、聞かなかった。めいか、助手か、それともばつか。質問には、二日目にするものがある。

もう二日目だよ。聞いて。 —J.



ドアがしまると、フリータはぼくを上から下までながめた。じっくりと。はんこをおしていい荷物かどうか、品定めするみたいに。

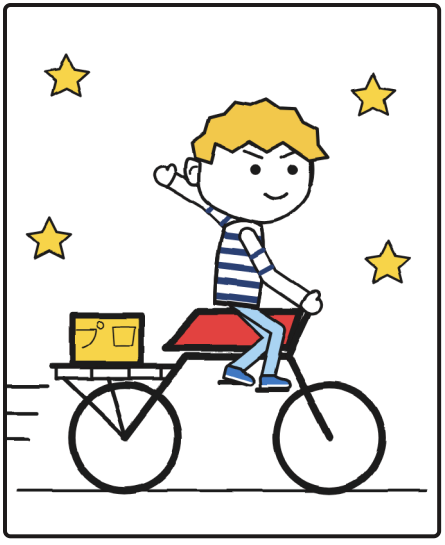
「ねえ、配達できるの？」

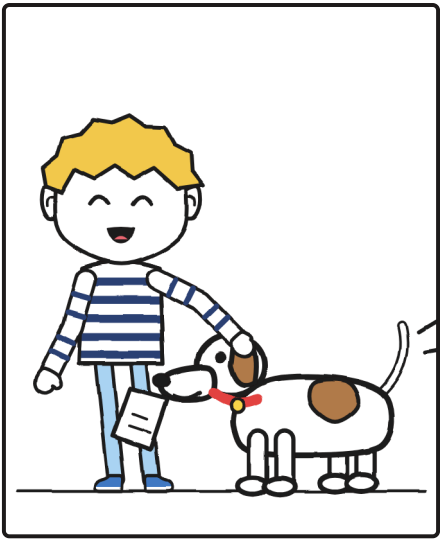
ここは正直に書いておく。このノートは「ひみつ」だけれど、どうせフリータが読むのだから。

本当のところ、ぼくがこれまでにとどけたものは、たった一つしかない。ある日曜日、二階の人の新聞が建物の入り口にほうり出してあって、ここにはヒーローが必要だと思った。ぼくは、それをその人の犬にわたした。犬は、それを食べた。ぼくの配達員人生は、そこでおしまいだ。

そしてぼくは、友だちがほしい人ならだれでもそう答えるように答えた：

「うん。前にいた町では、プロの配達員だったよ。」





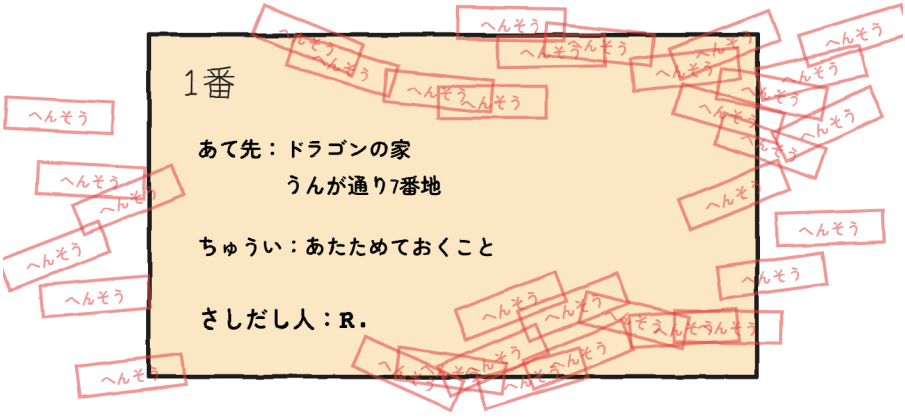
プロ。犬用。

うそは、はんこのおされた荷物に似ている。堂々と飛び立って、地面にさわらずに道をわたって、そして、いつか、もどってくる。このうそがいつもどってくるのか、だれがそれを声に出して読むのかは、そのころのぼくには、まだわからなかった。

フリータは、証拠を出せとは言わなかった。まっすぐ棚へ行って、一つだけ残っていた荷物を取った。1番。とどけられないやつ。フリータの手は少しふるえていた。こわいからではない。こわいからだけではない。ベンチをあたためつづけてきた補欠が、ようやく監督に名前を呼ばれたときの、あのふるえだった。ぼくの手もふるえていたけれど、ぼくのほうがうまくかくせた。ばれたのは、セーターをうらがえしに着ていたことだけだ。

へんそうのはんこを数えた。三十七。ラベルというより、はんこの置き場だった。

その赤いものの下に、もし気になる人がいるなら、こう書いてあった：



- あて先：ドラゴンの家、うんが通り7番地
- ちゅうい：あたためておくこと
- さしだし人：R.

「夜明けまでにこれをとどけたら」とフリータは言った。「マラさんも、わたしにもどってきた荷物の配達ができるって、やっとわかるはず」

「じゃあ、できなかったら？」

「できなかったら、ひとりでもどってくる。それで、ここでは何も起きなかったことになる」

とてもいい計画に思えた。計画に必要なものが、二つともそろっていた。うまくいけばごほうびがあり、失敗しても何も起きないこと。ぼくはまだ、中に何が入っているのかを知らなかった。



だれかが、自転車のベルを鳴らした。チリンチリン、と二回。自分の家ではないドアをたたくときみたいに。ショーウィンドウの向こうに、ヘルメットをかぶった男の子があらわれた。黄色いリュックには、店の中からでも読める大きな字で、「イナズマ便。十分でとどかなければタダ」と書いてある。

「『ありえない はいたつ』だって？」と、その子は言った。前の土曜日にも同じ冗談（じょうだん）を言ったことのある人の口調で。「ほんとにありえないな。おまえたちに何かがとどけられるなんて」

トニョ。すごく はやく、すごく つまらない ものを とどける。

「じゃあ、今日はこれをとどけるのよ」とフリータは言って、荷物を持ち上げた。

トニョは「ドラゴンの家」と読むと、大笑いして、ヘルメットを落とした。ヘルメットはドアのところまでころがった。トニョは笑いながらそれを拾い、立ち上がったときには、もう笑っていなかった。

「うんが通りに、7番地はない」とトニョは言った。「5番地の次は9番地だ。おれは探したから知ってる」

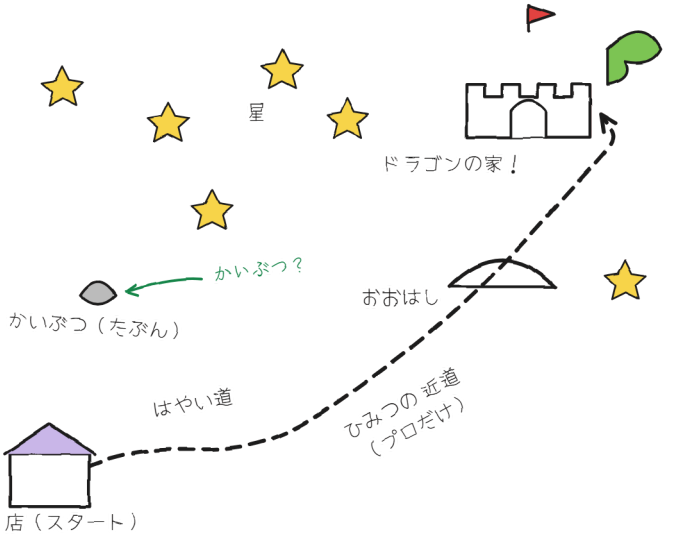
「どうして探したの？」とフリータが聞いた。

トニョはヘルメットをかぶり、わけもなくもう一度ベルを鳴らして、ものすごい速さで走り去った。答えたくない質問があると、トニョはいつもそうするのだ。ぼくの手元には、二つの情報が残った。トニョが7番地を探したこと。そして、イナズマ便も、何でも速いわけではないこと。



配達の地図を作った。プロの配達員は地図を作るものだし、ぼくは、理屈の上では、自分がプロだと言ったのだから。

地図には、「はやい道」と、「ひみつの近道（プロだけ）」と、「おおはし」と、「かいぶつ（たぶん）」と、星が六つあった。星には、何の役目もない。ただ、星のない地図は、本格的な地図じゃない気がしたのだ。



星は 道に ない。

かいぶつも、道にはいなかったよ。確(たし)かめたの。 —J.

星のない本物の道を通って、ぼくたちは大橋をわたった。昼間の大橋は下りていて、みんながわたる。自転車、カートを引くおばさん、アヒルを連れた男の人。フリータは橋のまんなかを、ぴったり中央を歩きながら、はんこと消えないインクのことを、ものすごい早口でぼくに話した。水は、一度も見なかった。もう何度も見て、見なれているからだろう、とぼくは思った。オーバーオールのポケットから、カウンターから持ってきた砂時計(すなどけい)がのぞいていた。夜明けまであとどれくらいかを知る

のには、役に立たない。砂(すな)が落ちるのを見て、落ち着かなくなるだけだ。配達に砂時計(すなどけい)を持っていくような人なんだな、とぼくは気づいた。気に入った。ぼくが持ってきたのは、パジャマだった。

うんが通り7番地は、家じゃなかった。かべだった。

トニョの言うとおりだった。5番地の次は9番地で、そのあいだには、つるつるした明るい色のかべがあるだけ。ドアも、まども、呼(よ)び鈴(りん)もない。あるのは、地面すれすれの、何かとても小さなものにちょうどいい高さのところにある、しんちゅうの板だけだった。板には、動物の足の形をしたくぼみがあった。上に小さなくぼみが四つ、その下に大きなくぼみが一つ。ずっと昔に、だれかが何かをそこにおしあてて、かべがその形をのこしたみたいに。

「もしかしたらポストかも」とぼくは言ってみた。

荷物は入らなかった。横にしても。角から入れても。

かべにためせることは、ひととおりためした：

1. ノックする。（何も起きない。）
2. さけぶ。（何も起きない。でも、もっと大きな声で。）

3. 上からのぞく。ぼくはフリータの肩にのった。見かけよりずっと力持ちだ。頭を出してみると、向こう側には、もう一枚、かべがあった。また、かべ。
4. あきらめる。これがいちばん上手にできた。

ゼラニウムに水をやっていたおばさんが、バルコニーからぼくたちを見ていた。ジョウロを宙にかかげたまま。この映画なら、もう見たことがある、という顔で。

「その荷物ね、何年も前から来てるのよ」とおばさんは言った。「いつも、来たときのまま帰っていくわ」

意地悪な調子ではなかった。天気予報を読むみたいに言っただけだ。そしてまた水やりにもどった。この町では、とどけられない荷物も、天気の一つなのだ、とぼくは理解した。



寒かった。秋になったばかりの、そでから入りこんでくる寒さだった。フリータは、もう一度ラベルを、小さな声で読んだ。最後に読んだときから、文字が変わっているかもしれない、とでもいうように。

「『あたためておくこと』って書いてあるよ」とフリータは言った。「なのに、何年も氷みたいな棚の上にいたんだ」

ぼくは新入りだ。「あたためておくこと」と書いてあれば、ぼくはあたためておく。新入りは、説明書きを読む。それしか持っていないからだ。どの説明書きなら無視していいのか、まだわからないのだから。ほかの人たちは、同じ場所に長くいすぎて、もう読まない。知っているからだ。そして、知っていることがまちがっていることもある。

ぼくは荷物をセーターの下に入れて、もう一度大橋をわたり、エリアさんのパン屋の金あみの上にすわった。オーブンの空気が出てくるところだ。金あみは地面すれすれの、かべにくっついたところにあって、パンの皮のにおいのする、ぬるい空気がのぼってくる。ぼくはそこで、背中をのばして、荷物をおなかに押しあてたまま、じっとしていた。地面にすわって、パジャマで、服の下に箱を入れた人間にできるかぎり、堂々と。フリータは砂時計をひっくり返して、立ったまま、何も言わずに見張っていた。

赤ちゃんが できた ポストみたいだね。

声には出さずに、という意味だけど。

そのまま、ずいぶん長いあいだそうしていた。パンのにおいがした。ぼくは汗をかきはじめた。汗のことを考えないように、ぼくたちは話した。というより、ぼくが話して、フリータは必要なだけ答えた。

「どうして、これをとどけることにそんなにこだわるの？」とぼくは聞いた。「ほかにも十九こあるのに」

フリータは、砂が落ちきる前に、砂時計をひっくり返した。

「数えるのと、とどけるのは、ちがうでしょ」とフリータは言った。「わたし、もう何度も土曜日を、数えてきたの」

そのあと、フリータは、前に住んでいた町はどんなところかと聞いた。ぼくは、あやうく本当のことを話すところだった。そこで何かをした記憶はなくて、あるのは、そこを持っていた記憶だけだということ。ぼくはあのゴムのカエルと同じで、まだ自分の場所がなかったということ。口を開いて言おうとしたのに、出てきたのは別のことだった。バイクと、メダルの出てくる話だ。フリータは、ぼくを見ないままうなずいた。もう信じていないのだと思った。でも、フリータは、どうでもよさそうだった。それが、その朝のいちばんよかったことだ。

そのとき、何かがぼくのおなかを、軽くたたいた。コツン。

「今の、おなかの音？」とフリータはまゆを片方上げて聞いた。

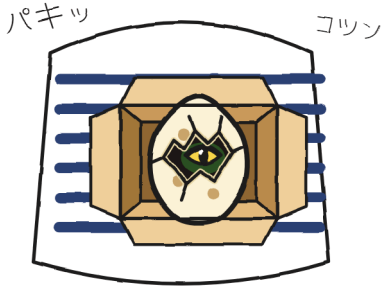
「ぼくのおなかは、コツンなんて言わないよ」

コツン。コツン。

ぼくはセーターをどけた。荷物のふたの下に、丸くて、青白くて、まだらもようのものがあった。くつの箱ではなかったし、箱に入れて売られているようなものでもなかった。ひびが入っていて、見ているあいだにも、そのひびは広がっていった。

パキッ。

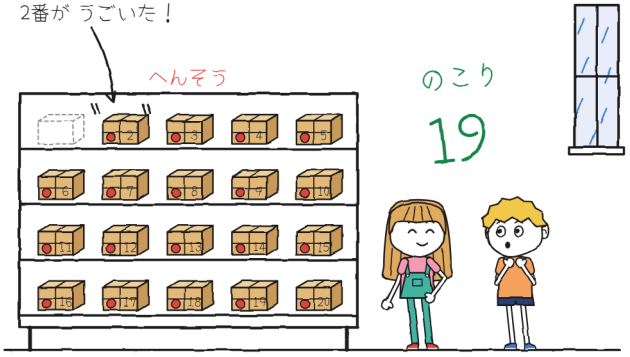
そして、にもつが ぼくを 見た。



ひびの真ん中に、黄色い目が一つ、ぱっちりと開いていた。荷物のことをよく知っているフリータを見てはいなかった。パン屋も、砂時計（すなどけい）も、夜明けになるとすべてがもどってくる空も、見てはいなかった。ぼくを見ていた。そして、この町に来て四日目（よっか）にはじめて、はてなマークだらけの町で、だれかが、ぼくがだれなのかをまったく疑（うたが）っていないように見えた。

荷物のほうがこっちを選ぶ配達がある。だれも教えてくれなかった。

2番は自分の場所にいた。1番のあいた場所のとなり、マラさんがまだ埋めていない場所の、フリータの札の下に。みどりで、「のこり 19」。おどしではない。買い物リストだ。



ぼくは近づいた。フリータは、はんこをおしていい荷物かどうか、品定めするみたいに、それを見た。ラベルには、いつもと同じ、ぎゅっとつまった字で、こう書いてあった：

2番・われもの。かみなり前に あけるな。

ぼくは二回読んだ。ぼくは新入りだ。ぜんぶ読む。そして、青いスツールにすわってかみなりを待ってはいけない、とは、どこにも書いていなかった。

そして、外では、雨がふりはじめた。

天気予報を見たよ。嵐が来る。 —J.